京都橘大学女性歴史文化研究所　第二七回シンポジウム
「発信する皇女たち　―斎王を中心に―」Ⅰ

発信する皇女たち
―斎王を中心に―

榎村寛之

みなさん、こんにちは。私は三重県にあります斎宮歴史博物館で学芸員をかれこれ三〇年ほどやっています。先ほど増渕先生から過分なご紹介をいただきまして、「斎宮に関して日本一の研究者」とおっしゃってくださいましたが、たぶん二番目がいないという意味での「日本一」だろうと思っています(笑)。「三本の指に入る研究者」と言われるけれども、実は研究者は二人しかいない…などというのは、よくある話です(笑)。

先ほど、増渕先生から拙著『斎宮―伊勢斎王たちの生きた古代史』(中公新書、二〇一七)をご紹介いただきましたが、この本に基づいた話は本を読んでいただければわかりますので、この本にも載っていない話をかなり折り込みながらお話をしようと思います。

その前に、斎宮をご存じのない方もおられますので、少しおさらいをしてから本題に入りたいと思います。

斎宮は、伊勢市と松阪市のちょうど中間の多気郡明和町にあります。

斎王は、天皇の代替わりごとに未婚の皇族の女性が一人選ばれて、伊勢神宮に仕え、その天皇が亡くなるか、交代するか、あるいは身内に不幸があったりするまでは、伊勢にい続けるというものです。

この制度は六六〇年ぐらい前に廃絶したため、いろいろなイメージが一人歩きしています。たとえば「いまの斎王さんはどなたですか?」というご質問が博物館に寄せられますが、伊勢神宮には祭主というお仕事がありまして、この祭主と斎王を間違える方が非常に多いのです。

実は斎王と祭主は全然違う制度でして、祭主は平安時代からずっと続いています。つまり、平安時代には祭主も斎王もいたのです。

平安時代の祭主は、宮廷の官司である神祇官の次官が務める役職で、ふだんは京の都に住まいしていて、伊勢神宮の大きなお祭のときだけ伊勢に行きます。しかも、大中臣氏という男性の貴族が代々継承するものと決められていました。これが明治までずっと続き、明治になって皇族の男性が務めるものに変わり、戦後に伊勢神宮が宗教法人になった段階で元皇族の女性が務めるようになりました。

ですから、「祭主も斎王も皇族の女性が務めるものですよね」と質問された場合も、「そうなのですが、祭主が元皇族の女性になってから現在でまだ四代です」とお答えします。このように、こと斎宮・斎王は、いろいろな意味で誤解されやすいものでもあるわけです。

さて、伊勢神宮から北西方向に約一〇キロ離れたところに斎宮の遺跡があります。伊勢神宮に仕える人なのだからすぐ近くにあればいいじゃないかと思われがちですが、伊勢神宮の近隣を流れる宮川から東側は伊勢神宮の本格的な領域になり、『中右記』という一一世紀の貴族の日記を見ても、夜遅くに天皇の勅使が行って、宮川を渡りはぐれてしまったとき、伊勢神宮の禰宜の屋敷ぐらいしか泊まるところがなかったと書かれています。

平安時代の伊勢神宮で、神宮の行政事務を行う太神宮司が置かれていたのは本体から約五キロ離れた、宮川の西側の離宮院でした。そういう伊勢神宮のすぐそばには、皇女がひとりいるわけではなくて、数百人の人びとが一緒に働く斎宮を置けないわけです。

ですから、平安時代の伊勢神宮のイメージは現在とは違っていました。京都から伊勢にやってきますと、伊勢神宮の神郡（神の領域）に入ったところに斎宮があり、そこからさらに進んで宮川を渡ると、その先に深い森があり、そのなかに伊勢神宮がたたずんでいるという感じです。

平安時代の伊勢というところは、都に近いたたずまいの整然としたオフィスと原始のままの森という二つの顔を持っています。「伊勢」と呼ばれる地域は、そういう地域であり、そのオフィス的な部分を代表していたのが斎宮でもあったわけです。

京都から近鉄に乗り、大和八木駅で大阪線に乗り換え、松阪駅で特急から普通電車に乗り換えて四駅目に近鉄斎宮駅があります。この駅の周辺の東西二キロメートル、南北七〇〇メートルという広い範囲に斎宮の遺跡が広がっています。桓武天皇の時代（七八〇～七九〇年）に方格地割（碁盤目状の街路）が造成されました。その区画は、東西一キロメートル、南北五〇〇メートルで、一ブロックが一二〇メートル四方という整然とした碁盤目状に整備されました。

ここで五〇〇人を超える人びとが働き、その関係者まで合わせるとおそらく二〇〇〇～三〇〇〇人級の規模の巨大なオフィスだったということが、発掘調査の結果、わかってきています。

そんなことは文献のどこにも書かれていませんから、発掘調査が始まるまで、「斎宮」といえば、近鉄斎宮駅の南側にある斎王の森という緑地とその周辺ぐらいの規模だろうと考えられていました。ですから、「お姫様は、こんなところに押し込められて、きっとお寂しかっ

たでしょうね」というようなイメージで語られることが多かったのです。ところが、発掘してみれば巨大な都市を伴っていたことがわかったわけで、斎宮のイメージは発掘によって劇的に変わったのです。

発掘調査の結果、初期斎宮想定地が史跡西部、斎宮歴史博物館の南で確認されました。斎宮ができたのは天武天皇の時代まで遡るのではないかと考えられる遺跡が、ごく最近発見され、かなりはっきりしたことがわかりつつあります。飛鳥時代から奈良時代にかけての斎宮の中心部分は、どうやら斎宮歴史博物館の南のほうにあったようです。

そして桓武天皇の時代ぐらいに、先ほどお話ししたような史跡東部の巨大な斎宮ができます。この区画は、紆余曲折があり、だんだん衰微していきますが、一二七二年に最後の斎王が伊勢から都へ帰って廃絶するまで残りました。さらに、この区画を構成する道路自体は、現在でもかなりの部分が使われています。

斎宮は平安時代の巨大なオフィス街だったということをご理解いただければ、きょうの本題に入っていきやすいかなと思います。

皇女の研究、天皇家を構成する女性たちの研究は、進んでいるようで案外進んでいません。『日本書紀』は、どこまで本当のことが書かれているのかわかりにくい本ですが、そのなかにも天皇の娘がけっこう出てきます。『日本書紀』は、建前上、まず最初に天皇家の系譜(神武天皇以来、どの天皇にはどんな奥さんや子どもがいたか)が書かれていますが、その中身がどこまで信用できるかは非常に大きな問題です。

神武天皇から孝霊、孝元、崇神から景行といった初期の天皇たちに関する『日本書紀』の記述を見ると、何人か皇女がいたことはわかっていますが、皇女の名前しか残っていなくて、結婚したという記録はまったくありません。皇女がいたら、その人が誰と結婚したかはけっこう大きな問題になるだろうと思いますし、少なくとも興味は持たれるところです。しかし、『日本書紀』という本は、どうもそういうことに関してきわめて冷淡です。景行の後の成務・仲哀天皇にはそもそも皇女の記録がありません。皇女がいなかったというよりも、皇女の記録が書かれていないと理解したほうがいいのかもしれません。

応神天皇には実に一一人の皇女がいると書かれていますが、そのうち結婚したと書かれているのは矢田皇女で、この人は応神天皇の息子の仁徳天皇の妃になり、後に皇后になります。つまり、結婚相手は異母キョウダイです。

仁徳天皇は、一人しか皇女がいなくて、雄略天皇の皇后になります。これは、おばと甥の結婚になります。

いわゆる天皇家の系譜が比較的信頼できると言われているのは六世紀前半の欽明天皇からです。欽明天皇は、聖徳太子の祖父です。それ以前の皇女で結婚した人のリストを作ってみると、意外に少ないのです。普通ありそうな皇女と有力な豪族の結婚の記事は一例もなくて、結婚相手との関係は異母キョウダイ、オバ＝オイ、オジ＝メイ、イトコ、同母キョウダイ、遠縁などがたくさん出てきます。

遠縁についていえば、たとえば仁賢天皇の三人の皇女の場合、手白

香皇女は継体天皇と、春日山田皇女は安閑天皇と、橘仲皇女は宣化天皇と結婚しています。雄略天皇の系統（俗に河内王朝や河内王権と呼ばれている系統）が武烈天皇の時代で絶えてしまう代わりに、応神天皇の五世の孫というずいぶん遠い親戚の継体天皇が、北陸から迎えられて、新しい天皇になり、そのときに仁賢天皇の手白香皇女と結婚して、この人を皇后にします。つまり、入り婿的な感じで入ってきて天皇家を継いだと言われています。この継体天皇の連れ子が安閑天皇と宣化天皇で、この三人と河内王朝系の最後の天皇である仁賢天皇の三人の皇女が結婚しているので、遠縁となるわけです。

ちなみに、仁賢天皇は雄略天皇の直系ではなくて、雄略天皇によって殺された市辺押磐皇子の子どもという関係にあるわけで、仁賢天皇の即位の段階で雄略天皇の娘と結婚しているから、これも遠縁となります。

継体天皇の連れ子である安閑天皇と宣化天皇も、よく実態のわからない天皇で、次の欽明天皇（手白香皇女が産んだ皇子。安閑天皇と宣化天皇からすれば異母キョウダイ）と争って、敗れたのではないか。いわゆる継体・欽明朝の内乱と呼ばれるものがあったのではないか。そのように言われているぐらい、この辺りの記録は信用することが難しいのです。

系譜の信頼性はともかくとして、注目していただきたいのは、当時の皇女で結婚記録がある人はすべて天皇と結婚しているという点です。つまり、古墳時代の皇女は、天皇（正確には大王）以外とは結婚しなかった可能性がある。または、結婚しても意味がなかった。皇女にとって意味のある結婚とは大王との結婚のみだったから、記録に残らなかった。

そもそも、応神天皇に一一人も娘がいて、仁徳天皇には一人の娘しかいないというのは変な話でして、皇女が全員記録されていたとも限らない。最近の考古学的な研究も含めますと、応神天皇や仁徳天皇の時代（五世紀頃）の天皇家（大王家）は複数系統あったのではないか、あるいは直接の血縁関係のない大王が就任していたのではないか、というような議論も盛んにされています。六世紀の大王家（いわゆる欽明天皇以降、聖徳太子の前後辺り）とはずいぶん違うとも言われています。

五世紀と六世紀では、こうした社会の変化自体が比較的大きくて、六世紀頃につくられた記録をもとに『日本書紀』が書かれたと考えますと、実在かどうかは別にして、『日本書紀』や『古事記』は継体天皇以前の血統のすべてを書かないという編纂スタイルだった可能性もあるのではないか。その場合、意味のない皇女は書かないというスタイルになっていたのかもしれません。

いずれにせよ、『日本書紀』や『古事記』が編纂されて、このような系譜がつくられる段階で、「歴史的に名前を残しておくべき皇女は天皇と結婚した人だけだ」という認識があった可能性がきわめて高いのです。

ところが、おもしろいことに、これらの系譜を見ておりますと、皇

女が産んだ皇子が天皇になるという例はほとんどありません。そもそも、皇女が子どもをなしているケースがきわめて珍しい。例外は仁賢天皇の皇女の手白香皇女、すなわち継体天皇の皇后になった人で、この人が産んだのが欽明天皇です。

手白香皇女の姉妹の春日山田皇女は、安閑天皇のお妃です。同じく姉妹の橘仲皇女も宣化天皇と結婚していますが、橘仲皇女は石姫と呼ばれる皇女の母で、石姫は欽明皇后で敏達天皇の母ですから、敏達天皇は父系母系とも仁賢天皇の曾孫にもあたります。子孫を残しているのはこの二人だけで、いずれも天皇家に吸収されていきます。

では、欽明天皇の段階ではどうだったかと申しますと、ずいぶん変わった結婚形態を採っています。欽明天皇には何人も子どもがいますが、たとえばその娘である推古天皇は、異母兄である敏達天皇の皇后になります。また、泥部穴輔部皇女は用明天皇の皇后になり、これも異母キョウダイですので、欽明天皇の子どもたちは異母キョウダイ同士での結婚という、それまでの時代にはあまりみられなかったことをしていきます。

異母キョウダイの場合、兄と妹が結婚するケースが多く、兄と結婚した妹が筆頭の妃となり、天皇が亡くなった後、後継者が定まっていない場合は妹でもあるその筆頭の妃が太后として即位するケースが出てきます。それがすなわち推古天皇の即位です。さらに、その後の皇極天皇も似たかたちで即位します(皇極天皇は舒明天皇とオジ＝メイ結婚)。

つまり、天皇の娘は、天皇に何かがあったときに女帝として即位することも期待されて異母キョウダイと結婚したというケースが、欽明天皇の時代(六世紀の中盤以降)に比較的みられるようになったのです。それは欽明天皇の一族の血の特化なのです。

欽明天皇の一族で、いちばんの有名人は聖徳太子(厩戸皇子)です。彼は用明天皇の息子ですが、後継者の山背大兄王の母は蘇我氏出身の刀自古郎女です。ところが、聖徳太子の一族は奈良時代にはいなくなってしまいます。大化改新の直前に、山背大兄王がその一族とともに蘇我入鹿によって滅ぼされてしまうのです。

その結果、蘇我氏系統の血を引く天皇候補がいなくなる一方で、敏達天皇嫡孫にして、やはり異母キョウダイ婚で生まれた舒明天皇(田村皇子)が残る。つまり、天皇家同士の血族結婚で生まれた一族だけが天皇家として残り、そこに天智天皇(中大兄皇子)と天武天皇(大海人皇子)が生まれるわけで、どうも六世紀から七世紀にかけての天皇家は、血族結婚を繰り返すことで、あるいは蘇我氏と結婚した一族を排除するかたちで、特別な家・氏をつくっている感じがします。

その役割の重要な部分を果たしてきたのが皇女であり、その結果、非常に日本的な女帝が生まれることになります。よく、「女帝は後継者がいないときの中継ぎである」と理解されることがありますが、推古天皇や皇極天皇に関する『日本書紀』の記述を見ると、単なる中継ぎとは考えられません。たしかに調整役的な性格は持っていますが、非常に主体的に動いて、皇極天皇は新羅の戦いのために九州まで行幸しています。その途中で死んでしまいますが、非常に積極的に動いていて、単なる「中継ぎ」というイメージでは考えにくいところもあり、

皇族の女性が五〇〇年代後半から六〇〇年代後半に至る古代国家の形成期に大きな役割を果たしていた可能性が高い、というふうにみられています。

そうした大きな役割を果たしたのは、必ずしも女帝だけではありません。実質的な初代の斎王といわれているのは天武天皇の娘、大来皇女です。大来皇女の時代の斎宮推定地では、先月、倉庫群が見つかっていて、現在、発掘調査中です。大来皇女の斎宮がそれだとすると、意外に規模が大きいのではないかということがだんだんとわかりつつあるという状況です。

大来皇女は、生年月日がわかっています。じつは『日本書紀』のなかで、生年月日がわかっている皇族女性は非常に珍しいのです。天智天皇も、天武天皇も、持統天皇も、いつ生まれたのかは『日本書紀』にまったく書かれていません。ところが、大来皇女だけは、皇極天皇が新羅との戦のために九州に行く途中に、岡山県の邑久の浦（現在の牛窓の辺り）で生まれたと書かれていて、斉明天皇七月四日と記されています。邑久（おく）の浦で生まれたから「大来（おく）皇女」と名付けられたとも書かれていて、『日本書紀』広しといえど、皇族で誕生日と名の由来がはっきりわかるのは実はこの人だけです。

さらに、この人が六七二年の壬申の乱の後、伊勢に送られます。『日本書紀』の書き方でとてもおもしろいのは、彼女について「斎王」とか「斎宮」という言い方はいっさいしていない点です。伊勢神宮の神様に仕えたという点において事実上の初代斎王であったことにほぼ間違いないのですが、『日本書紀』がつくられた七〇〇～七二〇年の間ぐらいは、伊勢神宮に仕える女の子を「斎王」と呼び、その人が暮らした宮殿を「斎宮」と呼ぶことは、必ずしも一般的ではなかったのです。

大来皇女については、壬申の乱の後の六七三年に「天照大神宮に仕える」という記録があり、六七四年に伊勢に向かうというかたちになります。

『日本書紀』には、もうひとつ「斎宮」という言葉が出てきて、天武天皇が三輪山の近くに倉梯河上斎宮を造ったという記事があります。三輪山の近くですから、飛鳥のごく近くです。

ところが、この斎宮に天武天皇が行幸しようとしたとき、天武天皇の娘である十市皇女が急に亡くなったので、行幸が中止され、そのまま消えてしまいます。三輪山の近くですから、神祇祭祀に関わるような宮であったと考えられ、十市皇女がそれに関わっていたのではないかとみられています。

十市皇女は、万葉集にご関心をお持ちの方はよくご存じだと思います。天武天皇と額田王の間に生まれた長女で、壬申の乱で負けた大友皇子の奥さんになりました。どうやら倉梯河上斎宮は未亡人になっていた十市皇女に任せる計画があったようですが、彼女が亡くなってしまったので、その計画は消えてしまったという経緯があるようです。

このように、天武朝にはいろいろな皇女の祭祀が行われていた可能性が高い。持統天皇も、祭祀的な役割を負っていた部分がしばしばう

かがえます。吉野によく行ったり、皇子たちと盟約を結ぶようなポーズを見せたりすることも、そういう一環であろうかと思いますが、天武天皇の時代には、斎王・斎宮というかたちで統一化された祭祀は実はあまり進んでいなかった可能性があります。それだけに大来皇女の特異性がみえてくるわけです。

ちなみに、大来皇女の母の大田皇女は、天智天皇の娘で、妹は持統天皇です。つまり、大来皇女は、天武天皇の娘というだけでなく、天智天皇の孫なのです。持統天皇に匹敵する血筋のよい女性ですから、この人が伊勢の斎王をやめて都へ帰った後、たとえば天武天皇の皇子と異母キョウダイ婚をすることになると、将来の有力な女帝候補にもなる。そういう立場の女性が斎王をつとめている点も、非常におもしろいところです。

大来皇女については、さらにおもしろい話があります。万葉集の巻一に、持統朝の初期に謀叛の疑いで死を賜った大津皇子を偲ぶ歌が残されているのは有名な話で、ご存じの方も多いと思いますが、ここで取り上げたいのは実在を証明した史料です。

奈良県の万葉文化館の建設に伴う先行調査をしたとき、飛鳥池遺跡という持統天皇時代の工房跡が見つかりました。

これは「当時の日本のシリコンバレー」という言い方をされた、最新の工業技術を集約した工房跡で、たくさんの木簡が見つかり、その木簡のなかに「大伯皇子宮」と書かれたものがありました。これは「大来」のことですが、木簡には「大伯」と書かれています。万葉集巻一でも、古い段階の大来皇女の歌には「大伯」と書かれていまして、時代が少し新しくなると「大来」に変わるのです。おそらく彼女が生きていた時代には「大伯」と書くのが普通で、『日本書紀』が編纂された頃になると「大来」に統一されるという変化があったのではないかと考えられます。

注目されたのは、彼女が宮を持っていたということと、「大来皇女」ではなく「大伯皇子」と書かれていたことです。たった一点の木簡で、これらの点から多くの議論がまき起こりました。

まず、天武天皇の子どもたちは、皇女・皇子に関わらず「皇子」と呼ばれていた可能性が高い。つまり、天皇の子どもであれば、男女にそれほど権威の違いはなかった。しかも、彼女が宮を持っている。宮を持っているということは、独立財産権を持っていることを示し、一定の権力者だったということになります。

大来皇女は、天武天皇が亡くなった後、都へ帰還します。それも大津皇子の事件に連座されて送還され、都では軽い幽閉生活を送らされていたのではないかと言われることも多かったのですが、この木簡が出てきたことで、大伯皇子宮という独立した行政機関・家政機関を持つことがわかり、幽閉された半ば罪人のような女性のものとはとても考えにくいことなどもわかってきました。天武天皇の子どもが非常に重要な存在であり、それは男女ともに変わりなかった、ということがうかがえるものでもあったわけです。

このように、非常に位の高い皇女が伊勢神宮をまず確実に祀ったわ

けです。それ以前の伊勢神宮の祭祀がいつから始まるのかということも複雑な問題がありますが、きょうは時間の関係で省略します。

ただひとつだけ。『日本書紀』のなかで歴史的に確実に「天照大神」という言葉を使ったのは天武天皇です。神話・伝承的記事はともかくとして、『日本書紀』の記述では「伊勢大神」とか「日神」という書き方が多いのですが、その神様を「天照大神」と明確にしたのは壬申の乱のときの天武天皇です。

さて、斎王という存在は、実は持統天皇の時代には置かれていません。「持統天皇が女性であるから、斎王は置かなかったのだ」という説や、「持統天皇が大来皇女的な存在を嫌っていたから置かなかったのだ」という説などがありますが、持統天皇の次の文武天皇は、持統天皇が産んだ草壁皇子が父親で、この文武天皇が即位したらすぐに斎王制度が復活しています。

すると、文武天皇は、祖母のやったことを全面否定して、いきなり斎王を置き直したと読めるわけですが、文武天皇の初期というのは、持統天皇が上皇でまだ元気ですから、祖母の意向をいきなりひっくり返すことは絶対にできない。

つまり、斎王の制度というのは、天武天皇の段階の後、持統期に一度リセットしている可能性が高く、そこでシステムとして定められて、それが持統から孫の文武へと引き継がれて、文武天皇のときに再スタートを切ったと考えることができそうです。持統天皇の二度にわたる伊勢行幸もそれと関係すると考えられます。

それ以来、斎王と天皇の即位が明確に関係づけられるようになっていきます。文武天皇の次は元明天皇で、この人は文武天皇の母です。文武天皇には首皇子(聖武天皇)という忘れ形見がありますが、奈良時代以前の天皇には、ある程度成人して、実際に政務経験を持たないと、周りから承認されないという暗黙のルールがあったようです。そのため、聖武天皇がある程度成長するまで文武天皇はその母の元明天皇に位を譲るのです。その後、元明天皇は、文武天皇の姉妹である元正天皇に譲ります。

なぜ文武天皇が母・元明天皇に位を譲ったかですが、実は元明天皇も天智天皇の娘であり、天武系ではありません。持統天皇の妹なのです。彼女も、天武天皇の時代、阿閇皇女と呼ばれていた頃に、十市皇女と一緒に伊勢神宮にお参りしています。つまり、伊勢神宮の何たるかがわかっている人が女帝になっているという、非常におもしろい特徴があります。

さらに、元明天皇の後を継いだ元正天皇は、伊勢神宮と直接の関わりはありませんが、特別に言えることがあります。京都にも「養老乃瀧」がたくさんありますが(笑)、あの元祖は伊勢と美濃の境界辺り、美濃国多芸郡にあります。この滝の水を親孝行な息子が汲みに行くとお酒に変わったという有名な伝説があり、この伝説の場所に元正天皇は行幸しています。実はこの人も伊勢の近くまで行ったことがあるのです。

この時代の女帝は、持統天皇も含めて、伊勢やその周辺に行ったこ

とがある人がずっと継いでいるというのも非常におもしろい。つまり、伊勢神宮や伊勢に対する尊崇の気持ちは、実は女性と大きく関わっていて、これがきょうのテーマである「発信する皇女たち」のベーシックな部分のひとつです。

この時代の皇族の女性という点で、次に注目できるのは吉備内親王です。吉備内親王は、元正天皇の姉妹で、長屋王のお妃です。長屋王の変のとき、長屋王と一緒に自ら命を絶つという悲劇的な女性です。

長屋王の邸宅跡で見つかった長屋王家木簡という、五万点に及ぶ木簡史料があり、これが奈良時代の皇族や貴族の研究に多大な情報をもたらしてくれました。そのなかではっきりとわかってきたことは、長屋王と奥さんである吉備内親王は財産が別々だったということです。作家の永井路子さんは、「あれは長屋王家木簡ではなく、大部分が吉備内親王家木簡だ」と言っています。

いまなら、結婚すると財産権はいったん夫婦合同というか、その家のものになり、夫が死んだら夫の財産を妻が遺産相続できますが、奈良時代はそうではなくて、夫の財産と妻の財産はそれぞれ自分たちが権利を持つという結婚形態でした。そもそも奈良時代に「結婚」という概念がどこまであったかは非常に問題で、気が向いたら結婚して、飽きたら別れる。その代わり、貴族の場合は、男性も女性も仕事を持っているケースが非常に多いので、別れても生きていける。その前提としてお互いの財産権が認められていた。そういう時代であると考える人が、現在では多くなっています。

吉備内親王の場合は、天皇の娘ですから、彼女の財産権は皇室の財産権でもあるわけです。皇女には皇室の財産を管理する任務もあります。吉備内親王の場合は、たぶん長屋王が滅んだ段階でその財産は再び皇室に帰ったのでしょう。結婚していない皇女の場合、その人たちに分けられた皇室財産も、彼女らが死んだら皇室に戻ってきたのだろうと思われます。

律令のなかでは、皇族の女性は皇族の男性以外と結婚してはいけないというルールがあります。「五世までの皇族男性は内親王を娶ることができる」という言い方をしますが、ある天皇の息子が一世で、そこから四代まで下がった世代の中でなければ内親王を娶ることができないというルールが、奈良時代には厳格に存在していました。

つまり、皇族の女性の結婚相手は初めから限られていて、これは『日本書紀』に記されている結婚した皇族女性の例は天皇以外にはほとんどない、ということと連動してきます。奈良時代の皇族女性が天皇家の財産を管理するとともに、それが一般豪族と結婚して外へ流出しない仕組みが同時につくられていたわけです。

もうひとり注目できる人として、井上内親王を挙げたいと思います。この人は、聖武天皇の娘で、聖武天皇の時代の斎王になっています。井上内親王が斎王になっている時代に、どうも写経をおこなっている可能性が高い。

少しマニアックな話になりますが、平安時代の伊勢神宮は仏教を厳密に拒否します。たとえば「仏」という言葉はタブーなので「中子

（なかご）」と言い換える。「お経」という言葉は「染紙（そめがみ）」、「お寺」は「瓦葺（かわらぶき）」というふうに、仏教に関する用語も使ってはいけないという細かい規定があるのですが、井上内親王の時代はまだかなり自由がきいたようです。

彼女は、都に帰ってから、天智天皇の孫の白壁王と結婚します。いわば天智天皇の孫を婿に取るというかたちになりますが、奈良時代後期には天武天皇系の皇族の内輪もめで天皇候補者がほとんどいなくなってしまいます。そのため、白壁王が光仁天皇として即位したことによって、井上内親王は皇后になります。というよりも、生き残っている聖武天皇の系列でいちばん血筋の高いのが井上内親王だから、彼女の婿を天皇にして、彼女を皇后にするというかたちで、夫が天皇になってしまいました。

ところが、その翌年、彼女は天皇を呪い殺そうとした罪で皇后の位を追われ、やがて謎の死を遂げます。皇后で、元斎王というのは、非常に大きな権力を持つ可能性が高い。実際、この井上内親王の皇后時代に平安時代の斎宮の原型が造られます。孝謙天皇（称徳天皇）は井上内親王の姉妹にあたる聖武天皇の娘ですが、称徳天皇の時代には斎宮は置かれていなかった可能性が高い。彼女は非常に仏教に傾倒した人なので、伊勢神宮にも大神宮寺を置いており、光仁天皇の時代にそれを追い出して、代わりに斎王を復活させました。その背景には、井上内親王の力があった可能性がきわめて高いわけですが、彼女はその大きな権力を恐れられて、皇后の位を追われ、謎の死を遂げることになります。

井上内親王と白壁王（光仁天皇）の間には、酒人内親王という娘がいます。この人も、光仁天皇の時代の斎王になります。その後、自分の異母きょうだいである桓武天皇のお妃のひとりになるという立場の人ですが、古代史研究者、田村葉子さんの御教示によると、彼女は晩年に二人の親王を猶子（義理の息子）にしています。桓武天皇には皇子・皇女がたくさんいますが、あまり後ろ楯のしっかりしていない人が何人もいて、そのなかの二人を猶子というかたちで自分の庇護下に置いたのです。

桓武天皇の皇后は、藤原乙牟漏と呼ばれる人で、藤原氏四家のうち式家の出身です。この人は、三〇歳そこそこで、子どもだけ残して亡くなっています。ですから、桓武天皇には、その全盛期に皇后がいない。その意味で、桓武天皇は外戚（皇后の実家）に気兼ねすることなく専制政治を行えたのですが、皇后の代わりになりうる立場の人はやはり皇族出身の女性ということで、酒人内親王は皇后に比する権力を持っていた可能性がきわめて高い。

酒人内親王の娘である朝原内親王も斎王であり、さらに桓武天皇の時代のもうひとりの斎王に布勢内親王という人がいます。こういう人たちも、非常に大きな荘園をたくさん持ち、すごい財産家だったことがわかっています。

つまり、奈良時代の皇女たちは、非常に財産持ちであり、場合によっては皇后になったり、皇后に準ずるような権力を持つというように、大きな権力を持ち、いろいろな意味で制限の少ない権力者になりうる立場だったということにもなります。

ですから、政変に巻き込まれると、井上内親王や吉備内親王のように殺されてしまいます。これはある意味、両刃の剣でもあるわけです。

ところが、平安時代になると、この様子がだんだん変わってきて、桓武天皇は再び異母キョウダイ婚を子どもたちにさせています。藤原乙牟漏は三人の子どもを残して世を去り、その長男の平城天皇と、次男の嵯峨天皇が兄弟で後を継ぎます。そして、長女の高志内親王に、桓武天皇の別のお妃から生まれた淳和天皇を婿として取り、平城・嵯峨・淳和の三兄弟が桓武天皇の次の時代に続いていきます。つまり、桓武天皇は藤原乙牟漏が産んだ子どもたちやその婿を天皇にしていくという計画を持っていました。

さらに、桓武天皇は、平城天皇と嵯峨天皇についても、自分の別のお妃から生まれた娘たちを娶合わせます。つまり、平城・嵯峨・淳和の三天皇は異母キョウダイと結婚したことになります。

桓武天皇としては、そこで生まれた皇子・皇女を天皇として継がせて、その間の世代でまた結婚させて、桓武天皇の血を特化させたいと考えていたのではないかと考えられますが、敏達天皇の時代ならともかく、この時代になってくると儒教的な道徳観もあって、それもあまり支持されませんでしたし、皇子たちにもそれぞれの人格があります。

たとえば平城天皇は、桓武天皇の娘で元斎王の朝原内親王と結婚しますが、この人の記録を見ると「寵せず(愛することはなかった)」と書かれています。なぜなら平城天皇は藤原薬子という女性にメロメロでして、桓武天皇は怒り狂って、彼女を追い出してしまう。なぜ桓武天皇が怒り狂うかというと、藤原薬子は自分の娘が平城天皇の後宮に入ったときに一緒についてきて、平城天皇の目に止まって寵愛を受けるようになったからだという話があります。

これは当時においては大きなタブーです。つまり、後宮に入るということは、その段階で天皇と結婚したことになる。天皇と結婚した上、その母親とも恋愛関係になるというのは親と子と犯す罪という、当時の血族結婚のルールで最もやってはいけないことのうちのひとつだったのです。

そういうこともあって藤原薬子は桓武天皇に追い出されたのですが、桓武天皇が亡くなった後、また戻ってきて薬子の乱(あるいは平城太上天皇の乱)の原因となり、平城天皇と嵯峨天皇の対立を呼ぶことになったりします。

この例からもわかりますように、この結婚自体はあまりうまくいきませんでした。ところが、そのなかで一人だけ子どもができたカップルがあります。それが高志内親王と淳和天皇です。淳和天皇は、いわば入り婿ですから、結果を残さなければなりません。淳和天皇としては、桓武天皇のちゃんとした後継者をつくらないと自分の立場がなくなります。

それで、高志内親王と淳和天皇の間にだけ恒世親王という皇子ができまして、この皇子は、淳和天皇が嵯峨天皇から譲位された際に、嵯峨天皇から皇太子としての指名を受けます。ところが、恒世親王は、この立太子を辞退して、二〇歳ぐらいで死んでしまいます。血族結婚

ですから、あまり健康な子どもができなかったということもあるのでしょうが、それでも嵯峨天皇は自分の娘の正子内親王を淳和天皇に嫁がせ、そこに恒貞親王という皇子ができて、嵯峨天皇の息子である仁明天皇が即位したときに恒貞親王は立太子します。

つまり、桓武天皇、淳和天皇、嵯峨天皇の頃は、天皇と天皇の親族の内親王が結婚して次代の天皇をつくる、という考え方に非常にこだわりを持っていることになります。ところが、この恒貞親王も承和の変という内紛に巻き込まれて失脚して、皇太子の位を降ります。その結果、藤原氏から入った女性が産んだ天皇が後を継承していくという、いわゆる摂関家外戚政治のはしりが生まれます。

ただ、そういうなかにあっても嵯峨天皇の皇女の正子内親王は、ずっと権力を握り続けたようです。中国に「皇族であり皇后である」という意味の「淑庭公主」という言葉がありますが、先述の田村葉子さんの御教示によると、正子内親王もそのように呼ばれ、「皇女で、皇后である」として特別扱いをされていました。承和の変で息子の恒貞親王が失脚した際には、母親である橘嘉智子に強い怒りをぶつけたという話もあります。

さらに正子内親王は、その後、尼僧になっても、夫・淳和天皇の別宮の淳和院を継承し、そこに皇族の女性のうち身寄りのない人を集めて、尼寺として経営したということです。女性で、大きな財産を持ち、行政に深く関わっていく立場というのは、尼になった元皇后であっても持ち続けていた、ということがわかってきました。

ところが、この正子内親王あたりを最後にして、皇后の権力は大きく変わっていきます。まず第一に、皇后という存在がいなくなります。淳和天皇の次の仁明天皇の段階あたりから皇后が置かれなくなり、次の天皇の母親が、その息子が天皇になった段階で皇太后という位をもらい、皇太后に対して中宮職という役所を設置するルールができます。

つまり、中宮は、天皇の母親の別称になったわけです。天皇には妻がたくさんいるのに、そのなかに皇后はいない。しかし、次の天皇を産んだお妃が、次の天皇が即位した段階で中宮と呼ばれる。だから、中宮や皇后は、実質的にはその天皇のお母さんという意味でした。

では、その「天皇のお母さん」とは誰かと申しますと、多くの場合、摂関家である藤原北家の娘です。彼女たちに対する尊敬の言葉として、「皇后」や「皇太后」が使われるようになっていきます。

そういう人が出てくると、天皇と皇族女性の結婚の機会はきわめて少なくなっていきます。つまり、藤原氏摂関家大臣級の娘が産んだ人が天皇になる一方で、内親王が天皇の妻になり、万が一、そこに子どもができてしまうと、御家騒動のもとですから、内親王と天皇の結婚は淳和天皇の後はほとんどなくなっていくわけです。

一方、嵯峨天皇はたくさん子どもをつくりました。それは養育費がかさむことを意味しますので、養育費を削るために、母親の生まれが大したことがない皇子たちには源という姓を与えて、貴族にしてしまうというリストラをします。源という姓を与えるということは、「国から給料をもらって生きていきなさい」ということで、天皇家の財産

を食いつぶすわけではない。そうなると、源姓をもらってしまった皇族は、もう皇族ではなくなるので、内親王と結婚できなくなります。

このようなかたちで皇族のリストラが行われ、内親王と結婚できる男性皇族がきわめて少なくなっていきます。その関係で、五世以内の王が減少し、母としての皇族女性の意義も低下します。天皇の母は摂関家のお姫様のほうがありがたい、というわけです。

そういうことから、九世紀後半以降、皇女の非婚化が進み、結婚せず独身で終わる皇女が激増します。それは同時に、これまで持っていた皇女たちの政治的な地位も失われていくことでもあります。結局、皇女は天皇家から財産分与が行われ、独身のまま死んだら、その財産がまた天皇家に戻ることになりました。いわば、生涯の生活保障を受けて生きているだけの存在に変わっていくのです。

では、皇女の政治的役割はそれで終わってしまうのかといえば、必ずしもそうではないというのが、本日の本題です。

私の『斎宮―伊勢斎王たちの生きた古代史』という本にも取り上げましたが、斎王は基本的に内親王がなるのが最もよいわけです。そのなかで、天皇の位が長く続くと、伊勢に二〇年、三〇年といる斎王が存在します。伊勢に三三年という最も長くいた斎王として、醍醐天皇の同母姉妹である柔子内親王がいます。柔子内親王の頃の斎宮の関連遺跡からは、最も早い段階の「平仮名」を書いた墨書土器が出土しました。それによって九世紀末期から一〇世紀初めくらいに斎宮ではすでに平仮名が使われていたことなどがわかり、斎宮で当時の都の最新の文化が受け入れられていたことがうかがえます。

柔子内親王は、二～三歳で斎王になり、三〇代半ばで都へ帰りましたから、まるで浦島太郎です。ところが、彼女は都の生活にとても柔軟に対応して、醍醐天皇が亡くなった後、自分の姉妹や友人たちと歌のやりとりをした記録が残っています。自分につらなる人たちと非常に良好な関係をつないでいたことがわかっていまして、三〇年も田舎で暮らした世捨人とは思えないようなネットワークを維持しています。

そうした皇族女性のネットワークの具体的な例として、柔子内親王の少し後の、醍醐天皇の皇孫の徽子女王を取り上げたいと思います。

徽子女王は、三十六歌仙のひとり「斎宮女御」と呼ばれた女性です。斎王であって、天皇のお妃のランクのひとつである女御になった女性ということから「斎宮女御」と呼ばれ、紫式部の時代あたりに選ばれた三十六歌仙、すなわち「過去の歌人ベスト36」のひとりとして名前を残しています。

この「斎宮女御」、すなわち徽子女王は、斎宮でたくさんの歌を残していることで知られています。彼女は、斎王としては一〇代で務めていましたが、都へ帰り、村上天皇と結婚をして、規子内親王という女の子を産みます。そして、規子内親王が、村上天皇の息子の円融天皇が即位した際に、斎王に選ばれたため、徽子女王は娘と一緒に、再び伊勢にやって来ます。後半生を娘と一緒に伊勢で暮らし、そのときにたくさんの歌を残しています。

伊勢で歌を詠んでも、自分の手元にメモとして残るだけでは意味が

ありませんから、彼女はそれらの歌を、都にいる多くの皇族・貴族の女性たちと情報交換をするかたちで詠んでいます。

日本には、いわゆる「社交界」というものがなく、皇族・貴族がダンスパーティーを開いたり、男女を問わず一堂に会して儀式を行うことはありませんでした。基本的に皇族・貴族の女性は、仕事を持っていない限り、義務として家から出ることはほとんどありませんから、情報交換のやりとりはほぼ手紙であり、手紙のメインは歌です。したがって、歌は、多くの場合、メールのようなものだと考えていただいて結構です。

つまり、皇族女性のネットワークは、メールのやりとりで成立していた。今風にいえばＬＩＮＥのやりとりですね。彼女たちのネットワークは、限られた相手同士の歌や手紙のやりとりで成立するのです。

そうだとすると、京の街中にいても、あるいは京と伊勢に別れていても、連絡時間が長くかかるかどうかの違いだけで、実はあまり関係がない。皇族女性は多くの場合、貴族の女性たちを女官・女房として仕えさせ、そこにサロンがありましたが、そうしたサロン同士の交流も起こります。斎宮女御も、二度目に伊勢に下るときは、彼女に仕えていた多くの女性たちとともに伊勢に下り、斎宮で歌のサロンができます。その歌のサロンが、同時代の京都の皇族・貴族の女性たちの歌のサロンとネットワークを結んでいた、ということがわかってきています。

要するに、都と伊勢神宮を結ぶ表のネットワークに対して、伊勢と都を結ぶ裏のネットワークがあり、公文書だけではわからないような情報のやりとりは、実はそういった女性たちが担っていた可能性がきわめて高い。つまり、文化的交流の一面は、社会的な交流でもあり、女性たちのネットワークが、表の政治面ではわからない政治の部分を支えることがあったわけです。

それが一一世紀になると、よりはっきりと表れてきます。一一世紀、藤原道長の全盛時代に当子内親王という斎王が表れます。父親の三条天皇は、藤原道長に嫌がらせをされましたが、当子内親王は伊勢に下る前に「宝算十八年」の予知夢を見ます。

「天照大神が『この頃、天皇の娘が斎王になるケースは少ないけれども、この斎王は天皇の娘だから、私は非常にうれしい。おまえのお父さんには一八年の在位期間をあげよう』とおっしゃった。そういう夢を見ました」と、手紙で報告したのです。

ところが、三条天皇は三年ほどで位を去ってしまい、この夢は「はずれ」になってしまいますが、都と伊勢の情報の交流はそんな感じでも行われていました。

さらに長元四（一〇三一）年には、長元の託宣と言いまして、内宮の月次祭で荒祭宮の託宣と称して、斎王が朝廷を糾弾する事件が起こります。このときの斎王、嬉子女王がどういう働きをしたかは非常に興味深いところですが、彼女は宇治平等院を造った藤原頼通の妻の姉妹でもあり、藤原頼通に非常に近い立場から、時の天皇である後一条天皇や伊勢神宮の祭祀を握っている大中臣氏の二門と呼ばれる一族などに揺さぶりをかけるという動きを起こしていたようでもあります。

どうやら平安時代中期には、斎王が、摂関家と天皇家の緊張関係のなかで、託宣というお芝居で天皇に対して揺さぶりをかけるなどして、宮廷政治の駒になることもあったようです。

その次の斎王である良子内親王は、後朱雀天皇の第一皇女ですが、この人の時にも、内裏が火災にあったり、伊勢神宮の外宮が倒壊するなど、いろいろなことが起きます。そういうとき、「あらかじめ伊勢神宮から予知するようなメッセージがあったよ」とか「いますぐに謝りに来なくていいよ」という手紙を、盛んに父である後朱雀天皇に送っています。彼女がそういう手紙を送るというよりも、彼女を支えるシステム自体がそう機能するわけです。つまり、諸々の出来事に対して、宮廷の過剰なパニックを抑えるための情報発信ツールとして、「斎王が見る夢」が機能していたようです。

と同時に、良子内親王は、斎宮で、貝をテーマに歌を詠む「貝合」という文化イベントを開くなどして、斎宮女御の時代にあったような文化サロンとしての斎宮もずっと維持していきます。

この時代の斎宮は、規模はかなり小さくなっていますが、文化施設としての機能も保ちつつ、必要に応じて伊勢神宮からのメッセージを天皇に伝えたりする機能を持っていました。平安時代の皇女たちは、多くの場合、結婚できないとか、女帝になれないといった因子を持っています。同じ皇族でも、男性皇族に比べて「できないこと」が山積みです。そのなかで彼女たちは、自分たちのネットワークをつくり、さまざまなかたちで裏側から政治や文化に関与しようとするわけです。

源氏物語や枕草子も、このように表に出ない女性たちが書きました。紫式部も、清少納言も、本名はわかっていません。正史にはいっさい出てこない人たちなのです。そういう人たちが、いろいろなかたちで文化のみならず情報のサポートミッションを負っていたことがうかがえます。それが未婚女院、すなわち結婚しないまま、女上皇という身分を得ることで社会的に大きな立場を持つ皇族女性たちにつながっていくことになります。

斎王のポジションは、おそらく伊勢神宮そのものの権威に関わるものです。つまり、「こんな人が関わっているのだから、伊勢神宮というのはすごいのだ」というものとして始まった。すなわち、天皇の名代である斎王が伊勢にいる、ということが非常に重要でした。それはまさに非日常的な存在であり、非日常的なお祭がずっと続いているというのが伊勢神宮の特異性だったのだろうと思います。

斎王は、いわば伊勢神宮のセンサーでもあり、月一度、定期的に健康診断のような占いをして、その際に異常が見つかると、伊勢神宮のミッション(当時の言葉で「祟(たたり)」)があったというふうに理解されたものとみられています。

そして、大きな規模を持って伊勢神宮に臨む斎宮という存在は、伊勢神宮の権威を高めるためのものであると同時に、伊勢神宮にとっては都からのお目付役でもあり、大きな圧迫ですから、伊勢神宮と斎宮の間には潜在的な対立もありました。

たとえば先ほどお話しした長元の託宣事件の背景には、実は伊勢神

宮と斎宮を補佐する斎宮寮の潜在的な対立もあったのではないかともみられています。

しかしながら、皇女の政治的な立場が衰退するとともに、斎宮は非常に小さくなっていきます。平安時代中期になると、以前のような規模を維持できずに、内院というブロックだけに集約されていく傾向もみられるようです。

ただ、物語のなかでは、斎宮はいろいろなかたちでずっと取り上げられました。その典型が伊勢物語です。伊勢物語に、在原業平とされる男と時の斎王が不思議な一夜を過ごしたという第六十九段がありますが、このなかに「人目しげければえ逢わず」（〔女も男と逢いたいと思ったけれども〕人目が多いので逢うことができなかった）という言葉があります。この言葉の意味は、長い間、理解できませんでした。なぜ人目が多いのか。大勢の人が働いていたのですから、たしかに人目が多いのです。発掘調査の結果、斎宮は本当に人目が多いことがわかりました。

しかし、都の人間はそこまで理解できません。当時の伊勢のイメージといえば「海があるところ」「海女が泳いでいるところ」という感じで、宮廷の人は伊勢を全然知らない。それに対して斎王は、伊勢から情報を発信していきます。伊勢や伊勢神宮の情報を発信し、朝廷からの情報を受けるというかたちで、斎宮は一種独特の文化サロンになっていきます。都の文化を伊勢に伝え、伊勢の情報を都に伝える。それを維持していったのは皇女たちのネットワークであり、賀茂の斎王（京都にいる斎王）や内親王たち、女御たち、源氏の姓を受けた女性たちとネットワークをつなげていくわけです。

皇族、特に女性は、生まれた段階から悲喜劇的な存在です。身分はとても高いけれども、結婚はできない。高い教養を持っているけれども、それを生かせる場所がない。その意味で非常に悲喜劇的な存在でもあり、「東アジア的に見ても異常な体制」であるとも言えます。たとえば中国では、皇女がお婿さんをもらうことも平気です。

女性たちは、そういうものを超えて、そのなかで自分たちのネットワークをつくり、当時の政治や社会に対して一定の影響力を保っていました。古代だけでなく中世、近世に至るまで再度見直しをするなかで、それがもっとはっきり見えてくるのではないか。ネットワーク、情報という意味で見ていくと、「政治的には多くの意味を持たなかった」と言われている皇女たちも、あらためて理解をし直すことができるのではないか。非常に雑駁な話になってしまいましたが、本日の話はこのあたりで終わっておきたいと思います。どうもありがとうございました。（拍手）